

新刊紹介

新日本出版社 刊

アウシュヴィッツを生きのびた、101歳ポーランド女性の“警告のための記憶”

ISBN978-4-406-06072-1 C0097



強制収容所のバイオリニスト ビルケナウ女性音楽隊員の回想

定価2,484円(本体2,300円)

2016年12月24日

ヘレナ・ドゥニチ=ニヴィンスカ/著 田村和子/訳

四六判上製 272P

昼夜焼却炉から煙が立ち上るなか、囚われ人たちを労働に送り出すために演奏された明るいマーチ。楽器の心得がある囚人で構成された音楽隊の仕事だった。生きるには、良心の呵責に耐えて弾くほかなかった。ポーランド人のヘレナもそのひとり。戦後家族にも明かさなかった収容所での非人間的な体験や音楽隊の実態を、長い沈黙を破って克明に記した回想録。ヘレナはいまなお健在の101歳!



(著者)ヘレナ・ドゥニチ=ニヴィンスカ

1915年ウィーン生まれ、ポーランドのルヴフ(現ウクライナのリヴィウ)で育つ。1943年10月～1945年1月ビルケナウ強制収容所で、番号64118、女性音楽隊第一バイオリン。戦後はクラクフ在住。

「日本について考える時、わたしの念頭に浮かぶのは、大勢のショパンコンクールに参加する日本の若者、そしてコンクールの日本人受賞者です。ショパンの音楽は普遍的で、その美しさは世界中の人の心を動かします。ナチス・ドイツはショパンの音楽を禁制の曲にしましたが、有刺鉄線に囲まれたアウシュヴィッツ=ビルケナウ強制収容所の中でも演奏されました。わたしもまた、その女性音楽隊の一メンバーでした。」(日本語版への序文より)

(訳者)田村和子

1944年札幌市豊平区で生まれる。札幌東高校・北大理学部卒。現在はポーランドに風景の似た岩手県金ヶ崎町鳥ノ海地区に在住。

1979～80年虫博士の夫と子どもとともにポーランドのクラクフ市で生活、ポーランドの人々と文化に魅了され、1993～94年クラクフのヤギェウォ大学に語学留学、1996～97年東京外国語大学研究生、1997～98年クラクフ教育大学で児童文学を学ぶ。

(主な訳書)マウゴジャタ・ムシエロヴィチ作『クレ

スカ 15歳:冬の終わりに』(1990、岩波書店) / 『金曜日うまれの子』(1996、同) / 『ナタリヤといらいら男』(1998、未知谷) / 『竜の年』(1999、同) / 『ノエルカ』(2002、同) / 『嘘つき娘』(2008、同) / 『ロブロイエクの娘』(2012、同) / 『ちびトラとルージャ』(2014、同)、ヨアンナ・ルドニャンスカ作『竜の年』(1999、同) / 『ブリギーダの猫』(2011、同)、イヴォナ・フミエレフスカ作『ブルムカの日記: コルチャック先生と12人の子どもたち』(共訳、2012、石風社)、ヴァンダ・ジュウキェフスカ文&レオニヤ・ヤネツカ画『いとしのマーニャ: キュリー夫人の少女時代』(1987、草の根出版会)、ユゼフ・ヴィルコン絵&ピョートル・ヴィルコン文『カツベル、話してごらん!』(1989、グリーンピース出版会)、マリア・シポフスツィ&アンジェイ・シポフスツィ著『ガラスの盾: ナチスからワルシャワ王宮を守った人たちの物語』(1995、同)、エルジビエタ・アダミヤク著『沈黙の存在: 教会における女性の役割』(共訳、2008、サンパウロ)

(主な著書)『生きのびる: クラクフとユダヤ人』(2000、草の根出版会)、『ワルシャワの春: わたしが出会ったポーランドの女たち』(2003、同)、『ワルシャワの日本人形: 戦争を記憶し、伝える』(2009、岩波ジュニア新書)、紙芝居『わたしはテイコです』(絵 児玉智江&文 田村和子、2016、私家版)



強制収容所のバイオリニスト

ヘレナ・ドウニチーニヴィンスカ著

戦争に翻弄された女性たち

本書のサブタイトルにある「ビルケナウ」とは、ポーランドの村のドイツ語読みである。ここにアウシュビッツ強制収容所があり、著者はそこに収容されたポーランド人なのだ。

一般市民はいかに戦争によって翻弄されるか、そのことを本書から知ることができる。

第2次世界大戦が勃発した後、ポーランドはまず旧ソ連の占領下に入る。町中から生活物資は消え、労働命令によってひたすら働かされる日々。この旧ソ連占領体制が、瞬時にしてドイツ占領へと変わるのだ。ドイツ軍の一見すると秩序だった姿から、少しは経済状況が改善される、と期待するのだが、そのよつなことはありえなかった。著者と母親は理由もなく逮捕

評 山村基毅(ルポライター)

され、刑務所に収監。そして、アウシュビッツ―ビルケナウ強制収容所へと送られる。

著者は幼少時からバイオリンを習っていたため、収容所音楽隊に入ることになる。主な役割は、囚人労働隊の構内からの出入りに際して行進曲を演奏することだった。やがて娯楽のためのコンサートも開くようになるのだが、それは収容所における

囚人統治を助けているのでは、という葛藤をも生み出す。たとえば、コンサートの最中に多くのユダヤ人がガス室へと連行されていった。音楽によって過酷な運命を忘れさせられた。これを著者は「狡猾なペテン行為」と呼ぶが、音楽隊に対して他の囚人から冷たい視線が投げられることもあったという。

しかし、強制収容所という極限状況にあつて、自らの生命を守るためにとつた選択を、誰が責められようか。

本書の末尾には著者の記憶をもとに、五十数人の女性音楽隊メンバーの名、音楽隊在籍期間とその後の運命が簡単に記されている。多くは戦後まで生き延びているが、ビルケナウで死去あるいは他の収容所で死去という者もいる。その一人一人に、著者と同じような生の軌跡があるはずだが、それが語られることはない。その無念さが立ち上ってくるような気がした。



1915年、ウィーン生まれ。45年5月、自由の身となり、ポーランド音楽出版所に就職。音楽教育出版物などを手がける

(田村和子訳/新日本出版社 2484円)